



人をつなぎ 未来をつなぐ
明石のコミュニティ・スクール

コミコミスクスク

明石市教育委員会事務局学校教育課

第67回日本PTA全国研究大会兵庫大会

特別第2分科会（コミュニティ・スクール）が明石市民会館で開催されました

8月23日、明石市民会館にて開催された特別第2分科会では、小西哲也教授（兵庫教育大学教職大学院教授・CSマイスター）による、基調講演とパネルディスカッションが行われました。

基調講演では、「これからの時代の学校～社会総掛かりの教育の実現をめざして～」という演題に基づいた話がありました。

小西教授は山口県での取組と関連付けながら、これからの社会を生き抜くための子どもに必要な力をどのように育ていけばよいかということを具体的に話されました。特に印象深かった内容は、人生100年時代の到来を告げる政府広告の動画視聴を通して、急速に変化する社会が目の前まで迫っていると痛切に感じられたことです。動画の内容は、Society5.0時代に田舎で暮らす高校生の生活の様子を映し出したものでした。数分間の動画の中に、ドローンを利用した宅配システム、AI家電や無人バス、無人農機具を利用した生活がリアルに描かれていました。つまり、これからの社会は「科学の進歩によって“ふるさと”で便利な生活ができるようになる。」ということが広告の趣旨だと解釈できます。小西教授は、「そのような生活が実現すると課題になるのは、子どもたちが“ふるさと”に残ろうとする気持ちは誰がどのように育むのか、ということになる。」と話されました。私はその話を聞き、様々な技術や環境が進歩する社会だからこそ、地域を支える子どもを育てることが重要かつ必然であるということに気づきました。



パネルディスカッションでは、小西教授がコーディネーターを務められ、文部科学省関係者をはじめPTA関係者、二見北まちづくり協議会大谷会長、二見北小学校赤松校長が登壇されました。ここでは、コミュニティ・スクールを推進していくにあたって不安に思うことや、コミュニティ・スクールに期待することなどパネラーの方の“本音”が行き交うディスカッションとなりました。二見北小校区から2名のパネラーが登壇されたことによって、地域と学校とが同じ目標に向かってコミュニティ・スクールを推進していくということのよさや実態が浮かび上がってきたと感じました。また、コミュニティ・スクールの活動そのものの“わくわく感”だけでなく、そのような活動を通して、子どもが育ち地域がかわっていくことに期待する“わくわく感”があるというPTAの方の話が大変印象的でした。

基調講演及びパネルディスカッションを通して受け取ったことは、「社会に開かれた教育課程」の意義でした。「どこに向けて、何をどのように開くのか」というイメージは、各学校や先生方によって異なるものだと思います。コミュニティ・スクールをよりよいものしていくためには、そのイメージを各校で明確にもち、それを地域と共有していく必要があると考えます。これまでの取組に加え、社会の変化に柔軟に対応した教育活動を展開していくためにも、学校だけに閉じられた教育課程を刷新していくことが社会的な求めだとあらためて感じました。

（文責：コミュニティ・スクール担当指導主事 本所克寿）